

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	『史記』の〈歴史〉語りと教材としての可能性：高校2年生「鴻門之会」の学習から
Author(s)	井上, 泰
Citation	中等教育研究紀要 / 広島大学附属福山中・高等学校, 60 : 150 - 155
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/49290">10.15027/49290</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049290">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049290</a>
Right	
Relation	



# 『史記』の〈歴史〉語りと教材としての可能性

## —高校2年生「鴻門之会」の学習から—

井上 泰

本稿は、定番教材である『史記』の新たな教材の価値を、実践を通して思索したものである。本稿では、教科書に採録されている「項羽本紀」と採録されていない「高祖本紀」とを読み合わせることで、〈歴史〉や〈歴史〉語りの問題について考えていけることを、『史記』の教材の可能性として指摘した。

### 1. はじめに—定番教材のカノン化と授業改善

次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）が求められている。本稿では、その要求に応答するために、『史記』というテキストに注目する。もちろん、この改善要求はテキストの読み方ではなく、学習者の“学び方”についてのものである。しかし、本稿では、あえて学ばれるテキストについて注目したい。それは、テキストの読み方が異なれば、テキストの学び方も異なってくるからである。授業構想の手順は授業者毎に違うかもしれないが、多くは授業者は教材分析をした上で、学習者とテキストとの接点（言葉や文の意味などのテキストの表面上の理解からテキストの見方・考え方と学習者との接点などまで）を考え、学び方を含めた授業全体を構想するといった流れをとる。そう考えたとき、まず問題となるのは教材分析の方法や結果である。おそらく授業者のテキストの読み方によって、授業は変わっていく。したがって、アクティブ・ラーニングの視点が必要とはいえ、教材分析なしでは、授業は構想できない。稿者はそのように考えており、よって本稿ではテキストの読み方をまずは問題とした。

次に、なぜ『史記』に注目したのかということである。『史記』は古くから読まれ、教科書教材としても定番である。そのために、その読み方や学ばれ方もある程度、固定化している面がある。だが、そうした教材も、改めてその読み方や学ばれ方を点検し見直すことで、授業改善が図れるのではないかと考え、『史記』を対象とした。

では、『史記』は国語科教育において、どのように読まれ、何が学ばれているのだろうか。本来ならば、実践報告などを分析するべきであるが、『史記』の文学研究や教材分析、実践報告は非常に多く、ここでは教科書の指導書のみから確認する<sup>1)</sup>。

『史記』（「鴻門之会」、「四面楚歌」）所収の筑摩書房版『古典B 改訂版』の指導書に述べられている「単元のねらい」（195頁）には、次のようにある。

歴史的記録の保存を重んじる中国では、古来多くの歴史書が遺されてきた。その中でも正史の祖として重んぜられてきた『史記』を読み解くことによって、切迫した状況におかれた人間の言動に表れる心理を理解することを学ばせたい。また、『史記』という歴史記録のための文章が有する高い文学性と、それを支える司馬遷の透徹した人間観察眼についての理解も深めたい。古来名文として日本でも愛読されてきた『史記』は、散文が内包するリズムを強く感じ取らせる作品でもある。音読を積極的に行い、漢文訓読体が持つ日本語としての力強いリズムを実感させたい。

上記から『史記』学習で学ばれるものをまとめると次のようになる。

- ①切迫した状況におかれた人間の言動に表れる心理。
- ②歴史記録のための文章が有する高い文学性。
- ③作者・司馬遷の人間観察眼。
- ④漢文訓読体が持つ日本語としての力強いリズム。

では、こうしたもの<sup>2)</sup>と学習者とを出会わせることを指導書ではどのように考えているのだろうか。その答えらしきものは、「教材編集の意図」（195頁）にある。

また、臨場感溢れる描写を旨とする『史記』の中でも、項羽と劉邦の覇権争いはとりわけ有名で、人気も高い。本教材として取り上げた「鴻門之会」と「四面楚歌」は、その楚漢の興亡の中でも、最も有名な場面といえる。教科書教材としても定番作品であり、比較的まとまった分量の文章を読解する教材として評価が高い。実際この作品に触れたことによって、中国文学や歴史物語などへの関心が飛躍的に高まる生徒が毎年一定数おり、世代を超越して愛読される魅力を有している。（傍線は引用者。以下同様。）

傍線部を踏まえると、『史記』学習を通してねらわれていることは、学習者の「中国文学や歴史物語などへの関心が飛躍的に高まる」ことにあるといえる。確かに『史記』の魅力に触れることで関心が高まるかもしれない。

しかし、だからといって、「一定数」の学習者のために授業を構想するわけにはいかない。また、「中国文学や歴史物語」といった文学そのものやジャンルそのものへの関心を高めるだけではなく、そうした文学やジャンルとの出会いを通して、どのような認識が拡充されるのかといったことも考えなければならない。

では、どうしてこのように考えられているのか。それは「教材編集の意図」に『史記』は「世代を超越して愛読される魅力を有している。」とあるように、『史記』はカノン化されその価値がア priori に認められているからだろう。だがしかし、それは魅力を有しているのではなく、古人も含め、読者それぞれが魅力を発見してきたということである。『史記』（「文章が有する高い文学性」）や司馬遷（「透徹した人間観察眼」）、または漢文訓読体という日本語を称揚する語りにのっって『史記』を読むのではなく、もう一度それらが拓く問題領域を分析し、学習者の認識世界との接点を考えて、学習を構想していかなければならないのではないだろうか。そうすることで、自ずと授業改善はなされるのではないだろうか。

そのような考えのもと、本稿では、高校2年生の『史記』学習の実践報告を通して、『史記』学習の可能性について考えてみたい。

## 2. 教材分析—『史記』の〈歴史〉語り

教科書に教材として採録されているのは、項羽の事跡を記した「項羽本紀」のなかの「鴻門之会」である。しかし、沛公（劉邦）の事跡を記した「高祖本紀」にも「鴻門之会」は書かれている。だが、記述も少なく、いわゆる『史記』の「切迫した状況におかれた人間の言動に表れる心理」、「高い文学性と作者・司馬遷の人間観察眼」、「散文が内包するリズム」を読み取ったり、感じ取ったりすることはできない。したがって、従来の教材観からすると「高祖本紀」は教材として不合格かもしれない。しかし、「項羽本紀」では詳細に描かれている「鴻門之会」が、なぜ「高祖本紀」では、このように簡潔に述べられているのかと考えてみたらどうだろうか。そのように考えることで、「高祖本紀」も教材として読んでいけないだろうか。

さて、ではどうして「高祖本紀」では、「鴻門之会」は、簡潔に述べられているのだろうか。その答えの一つとして、項羽にとっての「鴻門之会」という出来事の意味と沛公にとってのそれとが異なるからということが考

えられる。沛公を暗殺することもできたが、そうせずに、後に沛公によって滅ぼされる項羽と、その危難から逃れて、後に項羽を滅ぼす沛公と、それぞれにとって「鴻門之会」の出来事の意味は大きく異なる。老参謀・范増と叔父・項伯との相反する考えの狭間にいて、結局は項伯の考えによって沛公殺害を見送った項王を語る「項羽本紀」と「樊噲張良故」と家臣たちのおかげ（「故」）で危難を逃れたことを語る「高祖本紀」。そこに〈歴史〉はある視点に立ち、ある出来事を意味づけたり、ある出来事と出来事とを結びつけたりしながら語られるものであるといった、〈歴史〉語りの問題をみてとることができる<sup>3</sup>。

さらに、『史記』の〈歴史〉語りの問題は、それが一冊の、一つの歴史書の中に、並存しているということにある。異なる〈歴史〉語りも、どちらかが淘汰されることなく、一つの歴史書の中に並存している。それが、『史記』の〈歴史〉観の興味深いところではないだろうか<sup>4</sup>。

例えば、こうした〈歴史〉観にもとづいた歴史書は、学習者の現実世界において、身近なものとして存在するだろうか。こうした歴史書と出会うことで、学習者の〈歴史〉観が揺さぶられ、相対化されたり、拡充していったりすることはないだろうか。

以上のように考えると、「高祖本紀」は簡潔であって教材として相応しくないと判断するのは早計である。カノン化された『史記』観にしばられることなく、テキストを読んでいくことで、そこで発見される〈歴史〉語りの問題を授業の中で扱っていくことができるだろう。

以上が、授業前の教材分析である。

## 3. 単元計画

では、実際にどのように授業を行っていったのか。ここでは単元計画について述べる。単元は以下のように構成した。基本的に、項羽を中心とした登場人物の動きや思い、考えが読み取れるようにした。ただし、教科書に採録されている部分だけでは、項羽の事跡を書いているということが分かりにくいいため、中国古典文学大系第10巻『史記（上）』（代表訳者 野口定男、平凡社、1968年）を用いて、「項羽本紀」全体を読ませたり、いつでも前後を読むことができるようにしたりした。また、沛公が鴻門の会を脱出した後、范増が激しく憤る場面や、沛公が裏切り者の曹無傷を誅殺した場面は重要な場面であるため原文で読んだ。

また、単元のテーマにかかわる〈歴史〉について学習者がどのような考えをもっているか自覚的にさせたり、〈歴史〉とは何かといった問いを立ち上げさせるために、導入時点で、『史記』が歴史書であるということの説明

沛公，以樊噲張良故，得解歸。	謝項羽。項羽曰，「此沛公左司馬曹無傷言之。不然，籍何以至此。」	○「高祖本紀」 沛公從百余騎，驅之鴻門，見
----------------	---------------------------------	--------------------------

した後で〈歴史〉とはどういうものかと授業者が問うた<sup>5</sup>。  
では、以下に全体の計画を示す。

#### 第1時

(授業内容)

- ①『史記』の概要について知る
- ②「項羽本紀」の概要を知る・読む
  - ・全訳を用いて大まかに読み、その語り方を実際に読みながら知る。全訳プリントは、中国古典文学大系第10巻『史記(上)』(代表訳者 野口定男、平凡社、1968年)を使用。

#### 第2時

- ①単元のねらいを知る
  - ・〈歴史〉について自分の考えを振り返る。
- ②本文読解 鴻門之会 1
  - ・沛公の言葉(「不自意」・「小人之言」と項王の言葉(「沛公左司馬」・「不然、籍何以至此」)から、それぞれの思惑を考える。

#### 第3時

沛公を許した項王の判断について考えるため、それ以前の場面を読む。

- 1 左司馬曹無傷の密告の場面  
本文「沛公左司馬曹無傷、使人言於項羽言、『沛公欲王關中、使子嬰為相、珍寶尽有之。』項王大怒曰、『且日饗士卒。為擊破沛公軍。』」
- 2 項伯の取りなし  
「於是、項伯復夜去、至軍中、具以沛公言報項王。～項王許諾。」
- 3 范増の説得  
范増説項羽曰、「沛公～此天子氣也。急擊、勿失。」

#### 第4時・第5時

本文読解 鴻門之会 2  
・范増、項王、項莊、項伯それぞれの言動から、複雑な関係を読み取る。

#### 第6時

本文読解 鴻門之会 3  
・樊噲の思いや人物像について読み取る。

#### 第7時

本文読解 鴻門之会 4  
・項王の樊噲への対応の意図を考える。

#### 第8時

本文読解 鴻門之会 5  
・樊噲の説得の論理を読み取る。  
・「未有以応」から項王の判断について考える。

#### 第9時

本文読解 「鴻門之会」のその後  
・張良が鴻門に留まり、沛公の代わりに謝した場面。

- ・范増の言葉(「唉、豎子不足与謀。奪項王天下者、必沛公也。吾属今為之虜矣。」)。
- ・沛公が、曹無傷を誅殺した場面。

#### 第10時

- ①高祖本紀における「鴻門之会」を読む。
- ②項羽本紀と高祖本紀を比較して、〈歴史〉に関して考えたことを書く。

#### 第11時

前回に書いた〈歴史〉についての内容を振り返るとともに、自身の〈歴史〉観を振り返る。また、そこから発展して〈歴史〉の複数性について考える。

以上が単元の全体である。次に、第10時に書いた学習者の記述と〈歴史〉について考えさせた第11時について詳しく述べる。

### 4. 学習者の思索

では、「項羽本紀」と「高祖本紀」とを比較して、学習者は、どのようなことを考え、記述しただろうか。

例えば、次のように〈歴史〉は出来事を見る視点(視線)によって変わるものと気づいた学習者もいた。

私は、この二つの鴻門之会を比較して、単なる出来事の記録としての歴史ではなく人に語り継ぐための歴史の一面に気がつきました。鴻門之会という同じ出来事なのに、視点が違くと、描かれ方(量とか注目されているところとか)が結構違って「項羽本紀」の項王にとってはたぶん鴻門之会は結構大きなこと(区切り)で、ここから立場が悪くなっていったりするから、そのきっかけとして項王を述べる上で欠かせなくて、がつつり描かれているけど、「高祖本紀」の沛公にとってはまだまだ始まりにすぎなくて(?)、そんなに項王が『諾。』と言ったとか何とかあまり大切ではないので、あっさりしか書かれていません。歴史は、それを見る視線によっても結構変わるんだなとわかりました。だとしたら、私たちが習っている歴史も、起こった出来事の一面に過ぎず、「敗者の歴史」という言葉がよく言われますが、他にも多くの面、捉え方があることをわかった上で学ばないといけないと思いました。

さらに本学習者は、その気づきの視点に立ち、自分が習っている歴史について「起こった出来事の一面に過ぎないものとしてみなければならぬ」と相対化しようとしている。また、上記の学習者が「単なる出来事の記録としての歴史ではなく人に語り継ぐための歴史」と書いているように、『史記』は出来事の記録ではないという気

づきを書いている学習者が多くいた。次の引用もそのような学習者の意見である。

〇〇がある時、××をしていた。一方そのころ△△では□□していたという書かれかたではなく、誰か一人を主人公として物語のような歴史書をかいているのだと思った。「項羽本紀」では項王や項羽を中心に項王陣営の動きを「高祖本紀」では沛公陣営を中心にかき、話しをすすめていて、小説を読んでいるような感じだった。「高祖本紀」に鴻門之会のことあまり詳しく書かれていないのは、沛公を中心に物語を書いているため、項王側のどろどろとした読み合いを省略しても歴史的にまったく問題がないと考えたからだと思う。

以上、〈歴史〉は単なる出来事の記録ではなく、「人に語り継ぐための歴史」（傍点引用者）や「誰か一人を主人公とする物語のような歴史」（傍点引用者）があるといったように、学習者の〈歴史〉についての考え方の幅が広がっているのが分かる。

また、その他に「項羽本紀」と「高祖本紀」がそのように書かれた理由について考察している学習者もいた。

「高祖本紀」では詳しく書かれているのに対して「高祖本紀」ではサラッと触れられているだけなのは二人の人生における鴻門之会の重大さが違うのでは？と思っ

た。項羽本紀は項王（項羽）の出番が多い。項王は部下の范増が沛公を殺そうとしていることを察知して、別の部下に沛公を守らせたり、怒りにまみれて会に入ってきた樊噲に冷静に肉や酒をすすめて対応していたことを描くことで項王は冷静で肝がすわっているあるべき王の姿という感じがした。だから項羽本紀は時代のトップである項王をたてるような書き方にしていると思った。一方で、高祖本紀は出来事の成り行きを簡潔に書いている。その中で、項羽本紀にあった、殺すか殺さないかの切迫した剣の舞のシーンは省略されているが、曹無傷の話のくだりは大きく取り上げられているので、高祖本紀では曹無傷の発言のせいで争いになりそうだったという風にも捉えられる。だから項羽本紀とは違って危険を招いた曹無傷と、その危機から沛公を守った樊噲や張良といった、沛公の部下に焦点があたっていたのだろう。

今回の学習では焦点化しなかったが、こうした意見から出来事の位置づけ方や意図によって、〈歴史〉の語り方が異なってくるといったことも考えていけるだろう。

## 5. 第11時の詳細

第11時では、「4」で見たような学習者の意見を振り返った。また、それにとどまらず、学習者のもっている〈歴史〉観について考える活動をした。

では、学習者の〈歴史〉観はどのようなもので、どのような記述を授業で問題としたのか。以下に、学習者の記述を引用する。

A それぞれを見比べると、一人称的な視点で書かれた『史記』は、単体では客観性をもった歴史書としては成立しないと分かった。

B 「項羽本紀」では何十行に渡って語られた鴻門之会が、「高祖本紀」ではわずか五行におさめられている。確かに、「高祖本紀」では張良の言動が語られていなかったり、范増にいたっては登場すらしていないが、歴史の「事実」を知るという目的においては簡潔でわかりやすい。普通、歴史書には人物の感情などは描かれないと思うが、「項羽本紀」では樊噲が怒る場面があったり、沛公を狙う范増、守る項伯、無関心な項王とそれぞれ登場人物の思惑が色濃く描かれている。「高祖本紀」が歴史の「記録」だとしたら「項羽本紀」は歴史の「ノンフィクション小説」とでもいえると思う。現代の私たちが感動系のノンフィクション映画を見たり、大河ドラマを見たりするように、この時代の人もその時にあった出来事の一つのストーリーとして特徴付けたり脚色したりして楽しんだ結果が、「項羽本紀」として残ったのかなと思う。

C 「項羽本紀」の鴻門の会は、沛公が項羽に勝つきっかけとなった出来事についてくわしくかかれているけど、「高祖本紀」は項羽と沛公との流れを大まかにかいている感じだった。後者の方が〈歴史〉的な視点から見ると、正解なのかもしれないけど、物語的には前者の方がおもしろかった。

Aの「客観性」、Bの歴史書の「普通」＝「人物の感情などは描かれな

い」、Cの「〈歴史〉的な視点から見ると、正解」＝「流れを大まかにかいている」、以上が学習者が持っている〈歴史〉観である。大雑把なまとめになるが、それらをまとめると、〈歴史〉とは、一つの客観的事実であり、個別的なものでなく全体的なものであるということになる。同じく、〈歴史書〉とは、客観的事実を述べるもので、人物の心情などは描かれず大きな流れが描かれるということになる。

だがしかし、「4」でも見たように、出来事の意味や

詳細は、その出来事を振り返る人（視点）によって、また語りの意図によって異なる。また、そのことは、考えてみれば、学習者も含め、日常的に私たちは経験していることでもあるだろう。しかしながら、〈歴史〉について考えるとき、どうしても人は、学習者は、「客観性」、「事実」に拘ってしまう。それを授業では問題とした。問題化の仕方は次に述べた通りである。

1. AからCの記述から〈歴史〉観についてまとめる。
2. 日常的なこととして考えてみようとして投げかけ。
3. 同一の〈出来事〉なのに、人によって思い出のかたちが違ったり、記憶の仕方が違ったり、意味が違ったりしたことはないか問う。  
例として、小学校や中学校の卒業記念作文などを読み、同じ出来事なのに、振り返り方や意味合いが違

うといったことに気づいたことはないかと問うと、色々と考えていくことができていた。

4. 日常的に、「記憶」に関しては、個別的なものを認めるのに、どうしてわれわれは〈歴史〉については「客観性」や「事実」に拘ってしまうのだろうかとして投げかけ。

以上のように問題化した。さらに、そこから『史記』の〈歴史〉観も問題とした。上述したように『史記』という書物のなかには、「項羽」の歴史と「高祖」の歴史とか併存しているのである。それをまとめ、『史記』の〈歴史〉観はどのようなものなのか、また自分たちの〈歴史〉観とどう違うのかと投げかけて授業を終わった。以下に板書を示しておく。

○『史記』の〈歴史〉観は？

高祖本紀 || 沛公にとつての歴史

項羽本紀 || 項王にとつての歴史

〈鴻門之会〉  
(同一の出来事)

『史記』

Bにとつての思い出・記憶

Aにとつての思い出・記憶

〈出来事〉

日常

○自分たちの〈歴史〉観は？

- ・客観的な一つの歴史がある。
- ・起こった出来事は一つだけである。
- ・歴史は客観的でなければならない。

〈歴史〉について考える

## 6. 終わりに

本稿では、「項羽本紀」に、沛公を中心人物とした視点から語る「高祖本紀」を合わせて読み、〈歴史〉というキーワードを与えて思考させること、〈歴史〉の問題について考えていくのではないかと、実践を通して考えてみた。

学習を通して、学習者の〈歴史〉は単なる出来事の記録や客観的な事実といった〈歴史〉観を揺さぶり、〈歴史〉には、「人に語り継ぐための歴史」や「誰か一人を主人公とする物語のような歴史」があるといった、〈歴史〉を語りと結びつけるような気づきや〈歴史〉には語る意図やある視点からの出来事の位置づけがあるという気づきをもたせることができた。そうしたことから、多少は、〈歴史〉は不変の固定的なものでなく、語られるもの、いかに語られるかによって異なるものといったことを考えさせられたのではないかと思う。また、異なる〈歴史〉の併存という〈歴史〉叙述のあり方についても考えていくことができたことも成果だろう。

そもそもなぜ〈歴史〉が問題なのか。それは、例えば、宇野邦一が「歴史は、ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され、その国あるいは社会の成員の自己像（アイデンティティ）を構想するような役割を担ってきた」（207頁、『反歴史論』、講談社学術文庫、2015

年）と指摘し、野家啓一が「歴史認識が民衆や国家の『ナショナル・アイデンティティ』と不可分であると見なされることから、それが政争の具に使われたり、ときには政治・外交上の問題にまで発展することも稀ではありません。」（22頁、註3掲書。）と指摘しているように、歴史が我々の自己像を決定し、異なる者との向き合い方を方向付けてしまうからである。国であれ、それよりも小さな共同体であれ、共同体のアイデンティティに寄りかかることなく、異なる他者と向き合っていく、そうした体力や知性は、社会を構成する市民にとって不可欠のものであろう。そうした体力や知性を養うためにも、〈歴史〉という概念についての理解を深め、また具体的な〈歴史〉語りに敏感になっていくことは必要なことではないだろうか。ともあれ、こうした〈歴史〉の議論の入り口に、『史記』の〈歴史〉語りを読むことによって立たせることができるのではないだろうか。それが本稿が提案する教材としての可能性である。

さて、最後にもう一つ、学習者の記述を紹介したい。

『項羽本紀』では「鴻門之会」の出来事が、登場人物の心情、思惑の変化、行動に至るまで詳しく描かれていて『高祖本紀』では家臣の働きによって、沛公（後の高祖）は命を救われた、という事実が端的に述べられている。「描く」と「述べる」を分けて書いたが、これには少しだけ意味がある。

かつて、フランスにはギュスターヴ・クールベという写実主義の画家がいた。彼は「見たものを描く」ことを良しとし、「天使は見たことがないから描かない。」といった旨の言葉を遺した。「描く」とは「見た、聞いたものを、そのままに写す」ということだというのだ。

「歴史」は「描かれた」と「述べられた」ものがある。できるだけ忠実に写されているが、要約されているが、それが「事実」であることには変わりはない。その違いは書き手の「事実」への感じ方によると思う。感動すれば書く、そうでなければ書かないのだ。

本学習者は、『史記』の叙述とフランスの画家の言葉とを結びつけながら、〈歴史〉を書き手の「感じ方」、「感動」の問題として考えている。やや飛躍があるかもしれないが、こうした意見から、〈歴史〉の書き手の問題についても考えていけるかもしれない。

よく知られていることだが、「論贊」では、「項羽本紀」を記したとされる太史公（歴史書を書いた者の名称）が、いわゆる「四面楚歌」の場面で、項王が「天之亡我。」と言ったことについて、「乃引天亡我，非用兵之罪也。豈不謬哉。」と批判している。このようにみると、太史公は、自身としては、項王を批判的に見ながらも、項王の言葉は言葉として書いていったということになる。そこに、〈歴史〉を書くという難しさをみることができる。だが、その一方で、虞美人との別れや、「江東の父兄」の思いを考えるなどの人間的な面も語られている。実際に、「論贊」を読んだ後に学習者に、考えたことを記述させたところ、

今まで「史記」を読んできて、確かに項羽はものすごく強く、自分の立場が危ういときでも強さを保とうとしている人物だとは思ったが、論贊で「自らの過ちを認めていないのはなんと良くないことか」と述べている割には、項羽に悪い印象を持たせるような記述はあまりなかったと思った。

と書いているものもいた。「4. 学習者の記述」では触れなかったが、学習者の気づきとしてある「項羽本紀」の「ドラマ」性なども踏まえながら、太史公は、どのよ

うなことを考えながら「項羽本紀」を書いたのだろうかや彼にとって〈歴史〉とはどういうものだったのかなど、上述の学習とは違った方法で〈歴史〉を問い深めていく学習も考えていけるだろう。そうした学習を構想する上で、『史記』の教材分析も改めて行う必要がある。書き手・司馬遷は、様々なプレテクストを見て『史記』を書いたとされる。司馬遷がプレテクストをどのように解釈して、それが『史記』の中にどう表現されているかといったことを明らかにする必要があり、またそれを持ちいて教材化も考えていけるだろう<sup>6</sup>。こうしたことも『史記』の〈歴史〉語りの課題として述べておきたい。

#### 【註】

- \*1 『史記』の分析や実践報告などは、平成 30 年度の漢文教育研究大会（広島漢文教育研究会主催）での発表資料を使って主に学ばせてもらった。また、身近なところでは金子直樹「高等学校 漢文の授業—史伝（『史記』から「項羽と劉邦」）を読む」（『中等教育研究紀要』第 53 巻、広島大学附属福山中・高等学校、2013 年）や古田尚行「『語る』ことと『語られる』こととの間—『史記』の場合」（『漢文教育』第 44 号、2019 年 12 月）などの実践報告がある。
- \*2 ①の心理、②の文学性、③の人間観察眼、④のリズムの内実の検討が必要だが、ここでは措いておく。
- \*3 〈歴史〉の物語性については、野家啓一『歴史を哲学する—七日間の集中講義』（岩波書店、2016 年）を参照した。
- \*4 浅見洋二・高橋文治・谷口高志『皇帝のいる文学史—中国文学概説』（大阪大学出版会、2015 年）では、当時の中国には「歴史」といった概念はなく、いわゆる「歴史」の概念にあたるものは「帝王の言動のファイル」である「史」であったと述べる。また、ヘロドトスの始めた歴史学と中国の歴史学には大きな懸隔があるとも指摘する。
- \*5 他に、中島敦『文字禍』を読ませたり、ジョージ・オーウェル『1984 年』などの小説を読ませる方法もある。今回も実際に、現代文の授業で『文字禍』を読む課題を出してもらった。感想を読むと学習者は歴史とは書かれたことか、そうでないのかの問いを受け取って真剣に思索していた。
- \*6 前掲『皇帝のいる文学史』では、『史記』の文体は、「『水滸伝』のような明代の白話小説」と「驚くほどよく似ている」とし、『調査・探求』であるよりも『ドラマ』や『物語』だった」と指摘する。こうした指摘を参考にしながら、『史記』の語りを考えていくことができる。